

## コロナ禍における大学生の Twitter 使用と幸福感 — 相手への意見表明の媒介効果を通じて —

大平 季林

COVID-19 の影響で 2020 年から大学生のコミュニケーション行動やライフスタイルが大きく変化してきた。また、日本の若年層に最も使われているオープンな SNS である Twitter 使用と精神的健康、特に幸福感との関係について多くの知見が得られるようになった。

自己意識が十分に確立していない若年層は Twitter を使用し、親しくない相手と社会的比較をすることで対人関係を損ない (叶, 2019), 自己呈示欲の高い人が Twitter のみを多用することで、ほかの SNS と併用した人より得られたサポートが最も少なく、幸福感も最も低いことが報告されている (叶, 2021)。また、Twitter は視覚的匿名性が高いため気軽に意見表明することはできる一方、相手を批判したり誹謗中傷したりする問題も多発している。これは Twitter ユーザーのネット・リテラシーを高めることで問題回避できるかどうかはまだ不明である。また、社会的寛容性が高い人は、様々な相手の立場を慮り投稿内容や表現に配慮することができるため、節度ある Twitter 使用を行い、間接的に友人関係満足度を高めることができる報告されている (平井・叶, 2019)。これを踏まえて、自己意識が十分に確立し、親密さが異なる相手に対する社会的寛容性が相手への意見表明にも影響し、その結果自身の幸福感にも影響すると考えられる。そこで本研究では、コロナ禍における大学生の自己意識や自己呈示欲求、社会的寛容性などといった個人特性と共に、Twitter 使用やそれにおける意見表明に関する行動などがいかに幸福感に関係するのか、また、意見表明をする相手との親密さによって幸福感との関係が異なるのかを究明することを目的とした。

上記の目的を達成するために、Twitter を使用している全国の大学生を対象として、2022 年 8 月上旬～9 月下旬の期間で Web 調査を行った。調査内容は、個人情報や自己肯定感、自己意識、自己呈示欲求、社会的寛容性、ネット・リテラシー、Twitter の使用状況、Twitter 上での意見表明に関する行動、幸福感などとした。回答に不備があったものなどを除き、354 名を対象として分析を行った。

分析を行った結果、以下のことを明らかにした。①自己肯定感や自己呈示欲求、自己未定因子、孤独因子が高く、友人や先輩に対する社会的寛容性が低い人は、Twitter を使用することで幸福感を低減させた。②Twitter 上で親しい相手に対して意見表明をすることで、幸福感を高めた。とりわけ、ネット・リテラシーの高い人ほど幸福感を高めることができた。一方、親しくない相手に対して意見表明を行ったとしても、幸福感への効果はなかった。③自己肯定感や自己呈示欲求、自己未定因子、孤独因子が高く、友人や先輩に対する社会的寛容性が低い人は、幸福感を低減させた。これらのことから、Twitter を使用する大学生のネット・リテラシーを高めると共に、Twitter 上で親しくない相手に対する意見表明を控えたほうが精神的健康を保つには有効だと示唆された。

(指導教員 叶少瑜)